
最高のバレンタイン

サトシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最高のバレンタイン

【コード】

N5087B

【作者名】

サトシ

【あらすじ】

ほのほの・・・だと思いたいです。

「緋崎君、ちょっといい？／＼」
「くだらん用だったら帰るぞ。」

いきなりだが
今の状況を説明したい。

学校の昼休み。
俺、緋崎 燈夜は
いつものように親友の樹と飯を食べてた。
「今日、何の日か知っているか？」
と、聞いてきた。

「2月14日、
憐れな男共がくだらない妄想に夢見る日。」
「ひどくねえか？」
「事実だろ？」

後藤の奴を見る。「
樹の振り向いた先には
ブサイクな後藤が
義理チヨコを本命と勘違いしてニヤついていた。

「まあ・・・たしかにな。」

とゆうか、お前はどうなんだ？」

「そもそも貰ったことねえし。」

樹が信じられん、という顔をしているが
実際貰ってないのだ。

「でも希望とかはあるだろ？」

「貰ってない分

貰ったらかなり喜ぶな。」

「狙っている奴とかいるのか？」

「狙ってもらえるモンでもないだろ？」

「欲しい奴はいるんだ。」

樹が教える〜といっているが
いっつもりはない。

俺が好きなのは

俺とは正反対の奴だ。

俺はいわゆる不良だ。

アイツ、春咲 優奈は

大人しい、可憐という言葉が似合う奴だ。

前に一度話しかけたら

周りの奴から何するつもりだ！といわれた。

・・・ちよつと落ち込んだ。

まあ、そんなわけで

今年も俺には関係ないと思ってた。

そして放課後。

「緋崎君、ちよつといい？／＼」

「くだらん用だったら帰るぞ。」

となつたわけだ。

正直俺は

好きな奴にはどう接していいかわからない。

「それで？」

「用件は何だ？」

思わず素っ気ない態度を取ってしまった。

「えつと・・・その、す、好きな人とかいる？／＼」

ヤバイ。

何がつて俺の心臓が。

「ああいる。」

目の前にな。

「！そつそつか。」

いるんだ・・・。」

なんで泣きそうになるんだよ。

「用はそれだけか？」

気の利いた言葉はないのかよ、俺。

「えつと・・・」

迷惑かもしれないけど／＼

その・・・好きなの／＼」

そういつてチヨコを俺に渡し黙ってしまった。

・・・俺はどうすればいい？

- 1 抱きしめる
- 2 押し倒す
- 3 口説き落とす
- 4 ダツシユで逃げる（笑）

何だこの選択肢は!?

特に2と4は!!

どっちも駄目だろ!!

・・・はあ、

とりあえず、1か3か。

3は無理だな。

正直今喋ってるのも奇跡に近いのに・・・。

ていうことは1か。

(この間約0.1秒)

行動は速かった。

ギョッ

「え、え／＼」

「迷惑なんかじゃない。

いったる?好きな奴がいるって。

お前のことが好きだ、優奈／＼」

「わ、私・・・グス、嫌われ、てるの、ヒック、かと」

「泣くなよ、

どう接したらいいのかわからなくてな。

ごめんな。

不安だったんだよな。

泣かせちまつてわりいな。」

涙で濡れた顔を上げてキスをした。

「好きだ、優奈／＼」

「私もだよ、燈夜君／＼」

最高のバレンタインだな。

ちなみにチヨコは俺好みの甘さ控えめのやつだった。

次の日、
なぜか樹に優奈がお礼をいつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5087b/>

最高のバレンタイン

2010年12月9日03時59分発行